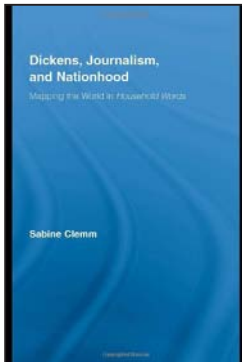


Catherine WATERS, *Commodity Culture in Dickens's Household Words: The Social Life of Goods*
(viii + 184 頁, Aldershot: Ashgate, 2008 年 4 月)
ISBN: 9780754655787

Sabine CLEMM, *Dickens, Journalism, and Nationhood: Mapping the World in Household Words*
(248 頁, New York: Routledge, 2009 年 4 月)
ISBN: 9780415958462

(評) 加藤匠
Takumi KATO



『ハウスホールド・ワーズ』誌に次のような記事がある。作家エドガー・スウィートウオートは、彼の肖像写真を狙って手紙を送ってくるものや目的を隠して訪問する写真家たちに悩まされていた。彼らの要求を頑なに拒絶し続けたものの、ある写真家が家に押しかけ、彼にこう告げる—「私はあなたの写真の注文を国内で二千枚、海外から千五百枚も受けているんです。悪いことはしたくないんですよ、とは言え撮影のために座るのがお嫌だと分かった以上、在庫の中からあなたに

似たものを選ばざるを得なくなったんですが、[ボクサーの]ビル・ティベッツが一番似ているってことになったんです。」結局スウィートウオートは観念して、写真撮影に応じることになる。ジョン・ホリングスヘッドが書いた、わずか二頁ほどの「賈の写真」という記事から見えてくるのは、現代のパパラッチを彷彿とさせる、当時の写真ブームに捕らわれた人々の姿だけでなく、作家の肖像写真をもひとつの商品として扱う、ヴィクトリア朝期の商品文化の広がりではないだろうか。

この記事についても言及されるキャサリン・ウォーターズ『ディケンズの『ハウスホールド・ワーズ』誌における商品文化』で扱われるのは、まさにこうした風潮である。『ハウスホールド・ワーズ』誌が刊行されていたのが1850年3月30日号から1859年5月28日号までということは、アイルランド大飢饉の最終年であった1850年から始まり、水面下でチャーティズム運動が存続するという不安定要因を抱えながらも、1851年の大英博覧会の成功に象徴されるような好景気に恵まれ、大英帝国の繁栄を大いに享受していた時代を色濃く反映

しているということだ。ウォーターズは『『ハウスホールド・ワーズ』誌から見えてくるのは、十九世紀半ばに発達した商品文化を甘受しようとする同誌の姿勢に特徴づけられる、人とモノとの変わりつつある関係に魅せられる姿である』(16)と述べ、『ハウスホールド・ワーズ』誌を当時の社会が刻みこまれたものとして捉えようとする。ここに、文化や文学におけるモノのあり方に注目するモノ理論との連関を見いだすことも可能であろう。

ウォーターズは『ハウスホールド・ワーズ』誌から商品文化と関連した記事を取り上げて分類し、章ごとに論じていく。具体的に取り上げられるのは、広告と『ハウスホールド・ワーズ』誌との相互関係、食品への不純物混入問題、いかさま治療、交霊術、旅行といった記事を貫く要素としてウォーターズが指摘する〈本物が持つ権威〉をめぐる問題、ウィンドウ・ショッピング、気球、展覧会をはじめとする消費のためのスペクタクルとして都市を捉える観察者が描く都市生活、ある商品が市場に出回るまでの過程をたどった記事、ディケンズによれば「人々のフェアであり、偉大なる葬儀屋のジュビリー」と化したウェリントン公の葬儀に見られるような、死を商業化する風潮への批判、『衣装哲学』を踏まえた、衣服と持主のアイデンティティの関係である。あるテーマに沿って構成された各章は多くの記事の精読が中心となっており、ヴィクトリア朝文化の様々な側面を知るうえで有益なものとなる。

本書のなかで特に読ませるのは、『ハウスホールド・ワーズ』誌に継続的に掲載されていた、商品が生産される過程を説明した記事を扱う第五章と第六章である。第五章では主に国内で加工される品が原料から製品になるまでを扱った記事、第六章ではコーヒーやスパイス類をはじめとする海外で生産された品がいかにならされているかを扱った記事が扱われる。ウォーターズが指摘するように、こうした記事が掲載されたのは、生活と生産の場が切り離されたために、商品の生産行為に労働が関わっていることが忘れ去られたことと無縁ではないだろう。彼女はここで1851年から1855年にかけて20本以上もの記事を寄稿したハリエット・マーティノウに注目する。マーティノウはバーミンガムにある螺旋や釘をはじめとするいくつもの工場を自ら訪問し、当地で作られる製品への偏見を払拭しようとして試みていたのだ。ウォーターズは、製品の生涯を辿るこうした記事に、衣服や装身具などに擬人法を用いて、独自の生命を持っているかのように描くディケンズの特徴が出ていると指摘する。

この二章で無視することが出来ないもうひとつの指摘に、従来の批評では編集長ディケンズの見解を直接反映したものとして扱われることが多かった『ハウスホールド・ワーズ』誌内で表明されている見解に、実際にはかなりの幅が存在するという事実がある。例えば、ディケンズが連載小説『ハード・タイムズ』

で激しく批判した工場の機械化に対し、ヘンリー・モーリーは労働者の技術水準と賃金を向上させるものとして機械化を肯定的に捉えた記事を寄稿し、黄燐マッチや地球儀の製造工程についての記事を寄稿したチャールズ・ナイトやマーティノウは機械化に対して好意的であった。ディケンズが多用する擬人法ですらも、マーティノウは製品への親近感を読者がもつための手段のひとつとしているのである。『ハウスホールド・ワーズ』誌の見解が対立する言説間の対話から成立していたという指摘は、同誌を編集長本人の見解を象徴するものとして安易に用いることへの警鐘となりうるだろう。

だが、本書にはいくつか首肯し難い点もある。記事の読みではなく、結論ありきの強引な論証がなされ、必ずしも成功していない章があるのだ。広告との関連を論じた第二章だが、『ハウスホールド・ワーズ』誌もひとつの商品である以上、同誌が広告的な要素を持たざるを得なかったというのは自明のことであり、ウォーターズの指摘を待つまでもあるまい。第八章においてなされる『ハウスホールド・ワーズ』誌は商品の重要性が増すなかで、モノに支配された社会生活の長短所を明らかにするための材料として、持主のアイデンティティと結びついた衣服を取り上げたという指摘も十分な論証に基づくものとは言い難い。

最大の問題は、商品文化をテーマとして設定したために、ヴィクトリア朝の持つもうひとつの側面である大英帝国と植民地の関係、そしてフランスをはじめとするヨーロッパ諸国との関係が十分に扱えていないことにある。第六章で帝国や植民地の痕跡をもつオレンジヤスパイスを扱った記事を論じてはいるものの、商品という観点のみで、セポイ反乱のような帝国を揺るがすような出来事を十分に論じることなど可能であろうか。1857年5月にセポイ反乱が勃発してから半年が経過した11月から翌年2月にかけて掲載され、反乱の要因が何であったかを解明する試みであったはずのジョン・ラング「インドをさまよって」について、ウォーターズは現地人がイギリス製品を自らに合うように変更を加えて使うさまについて言及するのみである。『ハウスホールド・ワーズ』誌が刊行されていた1850年代は商品文化の勃興期であるだけでなく、常に緊張を伴った対外関係が展開された時期であり、ナポレオン三世のクーデターが1851年12月、1853年にクリミア戦争、1857年にセポイ反乱が起こっている。小説や記事を通じて社会問題にも深い関心を示す『ハウスホールド・ワーズ』誌のそのような側面を黙殺すべきではない。

こうしたウォーターズの欠点を補完するものと言えるのが、サビーネ・クレムの『ディケンズ、ジャーナリズム、ネイション』だろう。これは1850年代という激動の時代に、イギリス国内において盛んとなった自身のアイデンテ

イティをどう規定するかという問題が『ハウスホールド・ワーズ』誌でどう表象されたかをめぐる論考である。全体の構成としては、まず第一章でイギリスが抱いていた典型的な自己認識が前景化する場として大英博覧会が取り上げられ、第二章ではそれがいかに構築されたのかが論じられる。そして第三章から第五章までで、『ハウスホールド・ワーズ』誌がヨーロッパ諸国、アイルランド、インドをどう表象したかが続けて論じられることとなる。

第一章『「異質な集団に囲まれて」—1851年大英博覧会と『ハウスホールド・ワーズ』誌』で取り上げられる大英博覧会について、クレムは自国中心主義に基づく当時のステレオタイプを反映した展示がなされていたと指摘する。大英博覧会では展示品から労働の痕跡が消されることで、それを担う労働者の存在も消され、結果的にイギリスのアイデンティティとして〈自由を愛し、独立心が強く、勤勉な、都市で働く中流階級男性〉の存在が前景化したというのだ。第二章『「ハウスホールド・ワーズ」誌における、イギリス的なもの（とそうでないもの）と国民の特質』においては、そのように提示されたイギリスのアイデンティティは直接定義されるよりも、むしろヨーロッパからの訪問者がイギリス側の欠点を指摘した旅行記や芝居を触媒として披瀝されたことが指摘される。そしてディケンズ自身が「島国根性」という記事で書いているように、『ハウスホールド・ワーズ』誌においては、国のアイデンティティを定義しようとする試み自体が偏見などの産物で、恣意的なものであることが認識されつつも、イギリス人によって共有されるアイデンティティの核が存在するものと仮定して記事が書かれていたとされるのである。

第三章から第五章までは、『ハウスホールド・ワーズ』誌において、ヨーロッパ諸国、アイルランド、インドといった国々とイギリスがそれぞれどのように関連づけられたかについて論じられている。ここで注目すべきはアイルランドという、ヨーロッパにありながらイギリスの植民地—すなわち、主権を奪われ、イギリス支配下にあるという意味では他の植民地と共通項を持ちながら、言語や文化といった点ではむしろイギリスやヨーロッパに近い、イギリスと大英帝国の植民地の中間項としての性質をもつ国が取り上げられていることだろう。こうした独特の位置は近年注目を集めており、2004年にはオックスフォード大学出版局から『アイルランドと大英帝国』なる研究書が刊行されたほどである。第三章『「ハウスホールド・ワーズ」誌はアイルランドをいかに扱ったか』では、『ハウスホールド・ワーズ』誌がアイルランドの問題を論じる際には同国との差異を強調する一方で、大英帝国というコンテキストから論じる際には他の植民地との差異を黙殺するきらいがあったという指摘がなされる。アイルランドに美点が何か認められるとすればそれはイギリスから感化された

ということになり、短所があったとすればアイルランド側に問題があるとされ、イギリスの驕りを高める植民地に相当するものとして表象されたのである。

第四章「大陸風的手段と方法」では、『ハウスホールド・ワーズ』誌が当時のコンテクストを踏まえてイギリスとヨーロッパの関係をどう位置づけたかが論じられる。本書によれば、当時のイギリスでは自国をヨーロッパから独立した存在と捉えるか、ヨーロッパの一員と捉えるかをめぐって見解が分かれていたという。前者の立場が支配的となったのは1848年の二月革命と三月革命、1851年のナポレオン三世によるクーデター直後の時期と再びヨーロッパ、特にフランスに対する不信感が高まる1858年以降である。革命の嵐が吹き荒れるヨーロッパと自由の精神が根付くイギリスとが対比されたうえで、自らの優位を説く言説が展開されたのがこの時期になる。逆に後者の立場が支配的となるのは、フランスと協力してロシアと戦ったクリミア戦争の時期であり、ヨーロッパは啓蒙、文明、自由を体現する存在として位置づけられ、イギリスはその中心的な役割を担うとされた。『ハウスホールド・ワーズ』誌はヨーロッパのある側面を、イギリス側の長所の誇示ではなく、それを契機として欠点を克服するために取り上げていたとクレムは指摘する。ここにはアイルランドに対して見られたような、自己の優位を露骨に主張する姿は見られない。

ウォーターズとの差異が最も前景化するの、第五章「『東洋の干渉者』—『ハウスホールド・ワーズ』誌とインド」で、ラングの「インドをさまよって」を論じた箇所である。自主性を持たず、暴力を好み、不誠実なインド人気質と彼らを持て余したイギリス統治こそがセポイ反乱の要因であり、反乱前にいかにその徴候が見られたかが主題となっているこの作品の分析を通じ、クレムは自らの優位を保つために自分たちとの差異を強調する言説が展開されているとし、アイルランドの場合と同様、インド支配の正統性に疑義が投げかけられることはない指摘する。

イギリスのアイデンティティを追及した『ハウスホールド・ワーズ』誌が最も必要としたのは、大英博覧会に集まった商品、ヨーロッパからの訪問者、ヨーロッパ、アイルランド、インドといった他者の存在であった。しかしこうした他者の扱いに象徴されるように、クレムの用いた分析の枠組自体には新味は乏しいと言わざるを得ない。ウォーターズにも言えることだが、大英博覧会をはじめ先行研究が多く存在する内容を扱っている以上、それはやむを得ないのかもしれない。だがこうした先行研究を超えて行くためには、単に記事自体を読むだけではなく、編集長ディケンズが記事をどう読ませたか考えたため、文字には現れない、記事の配置をはじめとする記事間の連関を考察する作業も必要となってくるだろう。またクレムが狙ったように、<『ハウスホー

ルド・ワーズ』誌がイギリスのアイデンティティを紹介するだけでなく、その形成にも一役買っていた」と論証するためには、更なる検証は不可欠である。

だが、いずれの研究も『ハウスホールド・ワーズ』誌の記事を大量に読み込むことに支えられた労作であり、『ハウスホールド・ワーズ』誌の豊饒にわれわれは改めて驚かされることになるだろう。ディケンズが創刊の辞で述べているように、「あらゆる階級の読者の娯楽と教育のために、そして時代の最も重要な社会問題の議論を助けることを企図した」『ハウスホールド・ワーズ』誌は、時を超えて、今なお現代のわれわれに多くのことを教えてくれる。

書評対象図書及び評者の募集

『年報』の書評では、ディケンズ関係及びディケンズと関係の深いヴィクトリア朝文学・文化関係の書籍を扱っております。もちろん海外での出版物も対象です。取り上げるべき本がありましたらご推薦ください。また、評者についても自薦・他薦・著者本人の推薦のいずれでも歓迎ですので、支部長（編集担当）または年報編集補佐までお申し出ください。少なくとも国内で出版されたディケンズおよびヴィクトリア朝関係書籍はすべて取り上げたいと考えておりますが、評者の引き受け手がなく断念した場合があります。ご協力をよろしくお願いいたします。